奨励賞（神奈川県立青少年センター館長賞）

目標という石に穴を開けるには

横浜市立大綱中学校　３年　笹部（ささべ）　葵（あおい）

「点滴穿石」という四字熟語を知っていますか。この熟語には「小さな水滴も長く落ち続ければ石に穴をあけられる」ということから転じ、「わずかな力でも積み重なれば大きな仕事を成しとげられる」という意味があります。

水滴がぴちゃぴちゃと滴るのはとても地味なことで、穴をあけるのはとてつもない時間を要します。では、水滴と石を、人間と目標に置き換えてみるとどうなるでしょうか。１日だけ練習した。細部ができていないのに通しの練習をした。こんな１回きりの１粒の水滴では目標という名の石に穴をあけるのは無理だと思いませんか？じゃあがむしゃらに試合に出場し続ければいいのかというとそうではなくて、その間には大量の細かな練習が必要なのです。

こんな風に、私は細かな練習を何度も行うことが、目標を達成するうえで最も大切だと考えています。

私は、４歳からピアノを習っています。今でこそ、合唱コンクールの伴奏をさせて頂くなどしていますが、はじめはそうではありませんでした。

はじめの頃は、ピアノに触らせてもらえませんでした。ひたすら、リズムの練習、譜面の読み方、音階の速読み……。地味なことばかりですが、１日１時間ちかく家で練習をしました。結果、いざピアノを弾くとなったときに、譜読みもすらすらと進み、弾きやすくなったのです。

その後もコツコツと部分ごとに切りとって練習したり、片手ずつ弾いたりして、順調に課題をクリアしていきました。

小学４年生の半ば頃に、新しく「ジーグ　パルティータ変ロ長調 BWV825」という曲を弾きはじめました。この曲は音数が多く、両手が交差するので、それまで弾いた中で一番難しいといえる曲でした。はじめの方から順番に片手で練習して……といつも通り練習していくと、だんだん弾けるようになって、楽しくなっていきました。そこで、テンポを上げてみると、思いの外弾けたので、その速さのまま練習し続けてレッスンへ行きました。すると先生に、「速すぎるから、もっと遅く弾きなさい。」と言われ、持っていった速さよりも大幅にテンポを落とされたのです。また、両手の動きが合っていないから、片手で練習するように、とも言われました。

それから、テンポを上げずに練習する日々が続きました、ひたすら片手ずつゆっくり弾く練習。私にとって、地味でつまらない練習だったので、少しも乗り気ではありませんでした。

２、３週間したころ先生から、「では、テンポを上げてみましょうか。」と言われました。嬉しい反面、先生のつけたメトロノームを見て「こんなに速く弾ける訳ないじゃん。」と思いました。絶対失敗する、と思いながらも、試しに弾いてみると、なんと前よりも速いテンポでスムーズに弾けたのです。

このとき、もし３週間続けずに、３日４日で放りだしていたら、きっとこの曲は弾けなかったと思います。この細かくて、地味な練習を、何週間も続けたことが、その後の演奏にも役立っていると思います。

この「細かいことを続ける」ことは、他のことにも言えることで、漢字テストで点をとりたいなら漢字を何回も練習するし、試合などで結果を残したいなら基礎練習をたくさんすると思います。そして、これらの地道な練習を、何日も続けるのではないでしょうか。

目標がどれだけ固い石かは分かりませんが、その石に穴をあけるには何千滴、何万滴といった大量の、小さな水滴を打ち続ける必要があるのです。